

2004年 雲仙岳水準測量結果

2004年度 調査参加機関
 九大地震火山センター・鹿児島大理学部

雲仙火山周辺では1991年5月の溶岩ドームの出現以来、地下のマグマの減少により西麓を中心に地盤沈降が続き、溶岩流出が停止した1995年には最大8cmの沈降が見られた。その後の測量結果も検討した結果、雲仙岳には少なくとも4つの圧力源（右図のA～D）が存在すると推定されている（河野他,2003）

1996年以降西岸路線の南部に隆起傾向がみられ、最大1.5cmの隆起があった。これは1995年の表面活動終息後も千々石湾深部約15kmに存在する圧力源Dが、さらに深部からマグマの供給によりわずかながらも膨張を続けているためと考えられた。

2004年の測量結果では、西岸路線の隆起傾向も停止し、いずれの圧力源も収縮に転じたと考えられる。

北麓路線も、97年以降見られていた圧力源Dの影響で、隆起傾向が見られていたが、2001年結果では、圧力源AやBの収縮の影響が大きく、沈降に転じている。

2004年測量では、深部圧力源Dを正確に把握するために、既存の西岸水準路線を口之津検潮所まで南に約20km延長した。国土地理院の水準路線を加えると、島原半島を8の字に結ぶ環状路線が完成した。

